

日光と無量光

独尊の巻

前篇

光明歎徳……………	一	宗教関係(啓示の要素)……………	二〇
日光と無量光……………	三	啓示の表明……………	二一
彌陀の威神光明……………	五	法の彌陀……………	二七
日光と彌陀……………	六	祈祷……………	三四
法身報身……………	一〇	十界……………	三四
光明……………	一一	三世一念同時態……………	三五
根底……………	一七		
まごころをさへげて……………	一九		

後篇

光明歎徳

彌陀世尊のみにいとひかりとはいと尊くひとりすぐれたまひてあらゆるほとけのひかりのよくおよばぬところなり。さればこのみほとけをばかぎりなきみひかり、ほとりなきみひかり、さへられぬみひかり、ならびなきみひかり、たけきほのほのみひかり、いとよらけきみひかり、いとよるこぼしきみひかり、さときみひかり、たえぬみひかり、はかりがたきみひかり、たえがたきみひかり、ひつきにこえしみひかりのたふたきものとなづけられたまつる。それひとありてこのみひかりにあふものは、心のつみのあかさへきえうせて、身もころばせもやすらげく、よろこびにみたせられて、すぐれてよきところこそおこるらめ。もし三つの苦しき處におちたるともがらも、このみひかりをば拜したてまつれば、かれらもみなやすらげきを得て、またなやむことなく、いのち終りぬれば、のちにげだつをばえしめられん。

かたふときみだのみひかりはあきらけくして、あらゆるところにかざりて、照らさぬくまもなかりければ、あらゆるさかひにもきこえざるところなければ、いまわれそのみひかりを稱へまつるのみならず、あらゆるほとけもそのほかのさとりびとたちの、大きなも、ちいさきなるも、みなことごとくほめたへまつること、またまた斯のごとくにぞありける。若しひとありて、そのみひかりとみいづのたかきみちからとをきゝたてまつりて、まごころをさへげていゝることたえざれば、そのねがふころにしたがふて、のち其國にゆきうまるゝことを得て、あらゆるもろゝのぼさつ及びさとりびとのために、その功德をばほめたへられん。さうしてのちまたさとりを證するときは、あまねくもろゝのほとけおよびばさつさとりびとのためにそのひかりをほめたへられんこといまのごとくならん。

日光と無量光

産生の中心本尊、法身が天則の本源とし宇宙一切萬物を以て我等衆生を天則を以て我等が生活の本となるに、一切萬物の中に太陽を中心として我等を生成せしむ。故に天地萬物悉く我らを活す法身の賜なれども我等は太陽を以て中心として仰がざるをえぬ。法身が絶対無限の靈界より相待有限の方面に衆生を産出するに太陽を以て中心本尊とす。

攝取の中心本尊、今度は相待生死の方面なる衆生を攝取して絶対無限の光明界に歸趣せしむるは即ち報身無量光如來なる絶待人格を以て中心本尊とす。故に無量光如來は心靈界一切諸佛神明等の中心本尊たり、即ち無量光如來は靈界の太陽に在ませり。若し夫れ靈界の太陽なる無量光如來の光明に攝取せらるゝにあらざれば我らは靈に活き永遠の生命圓滿なる靈格たる佛陀と成ることができぬ。されば我らは肉體

の生命が太陽の力を離れて生存できぬと同じく無量光如来の光明に依るにあらざれば永遠に活くこと能はず。太陽は法身より一切衆生を生産するの中心本尊にして無量光は一切衆生を心靈界に攝取し給ふ中心本尊なり。

一切動物と共に人類もまた動物生活として太陽の力に依て活ると共に人類は精神生活をしてゐる。此れに就ては是太陽の力により生活する生物である。世の聖人また靈界の偉人及びすべて宗教的の靈に活ける人は皆に太陽の力に依て活けるのみにあらず超日月光彌陀の光明に依りて靈に活ける人なり。彌陀は衆生を永遠の生命とし聖者として人を靈に活かす靈光の故に超日月光と名づく。釋尊及び龍樹天親を始とし空海源空等のすべての靈界の偉人等は悉く超日月光に依て活る超人たり。我等辱なくも彌陀の光明に靈活せられて念々念佛して甘露灌頂の生命とは成れり。此肉體を活かさるゝ太陽の恩恵を感謝すべきと共に彌陀の超日月光の恩徳に報謝せざるべからず。靈の生命は肉の生命よりは尊ければなり。

彌陀の威神光明最尊第一

大乘佛教の本尊は小乗教の人的中心本尊と爲すとは大に趣きを異にす。小乗教の本尊は此土顯現の釋尊の外に別に靈界の絕對的本尊たる靈的佛陀を立てず。大乘佛教は人佛釋尊の外に大乘特有の靈格たる神尊を立つ。されば佛華嚴經に其本尊を説て曰く佛陀無上尊を成したる時に華嚴三昧に入り給ふて宇宙を觀すれば、即ち宇宙全體が即ち一の蓮華藏世界である。其中心の蓮華に盧舍那如来安住し給へり。此無量光を（報身）中心本尊として一大蓮華の中臺に座し給ひ、周匝せる千の蓮華に一々の蓮華に各各百億の華葉あり。一々の華に各々一釋迦在ます（應身佛）。斯千に各々百億合して十萬億の圍繞せる釋尊を眷屬として中臺の無量光如来無量の相好無量の功德聖備の身を以て一切諸佛の本地として一切諸佛を統攝しまた一切諸佛に命じて各一世界の衆生に教導利生せしむる權威を與へ給ふ。

中臺の最尊第一なる無量光如来は光明普く十方世界を照らして念佛の衆生を攝して靈性を開發し其垢質なる煩惱を靈化した給ふ。分身せる十萬億の諸佛は各自の分擔せる世界に出でて其衆生に教導するに唯一の無量光如来に歸命信順して永恒の生命（涅槃）無量の光明（正覺）の圓滿なる靈格に歸趣すべき眞理を教へ給ふ。大乘佛教の釋尊には其精神の内面に於て斯の如き大なる内的生活の絕對的大靈格の尊神との不可思議の關係を以て本地と垂跡との聯絡を以てす。故に小乗教の單なる釋尊とは大に異なる處あり。大乘佛教にして最高等なる圓滿なる宗教たることを得。小乗佛教の佛陀は已に入滅し給ひし後は衆生の宗教心を攝めて常恒に衆生を統治し照鑑し給ふ大なる如来の在ますことを立てず。凭の如き小乗教の佛は宗教としては不満足なり。

日光と彌陀

我等衆生地球上に生を受け此生理的に活きつゝあるものは大なる宇宙の力に依つて活かされつゝあるなり。宇宙萬物の中に於て太陽の力は最も大なるなり。我等は此太陽の力に依て活かされつゝあるなり。太陽は法身佛の分身なり。法身佛が太陽と現はれて不可思議の力を以て一切衆生の（

概して云はゞ科學者には宗教的の性質なる尊崇性が缺けてをる。故に自然萬物に對しても有がたい尊い杯と云ふ感情は有つてをらぬ。故に太陽に對しても有がたいとか亦尊崇すべき神などとは決して想ふてをらぬ。然れども科學者は太陽は偉大なる力の源であることは認めてをる。科學者は太陽の大なる力あることを認めてをるものはない。此地球なる物は本太陽から分れた物にて太陽は親なれば地球は子である。親の太陽は幾萬年の後に至つても子をみついでをる。永遠にエネルギーを與へてをる。世に太陽ほど偉大なる力と不測の働をもつてをるものはないと云ふことをも信じてをる。彼の唯物主義の代表たるヘツケルでさへ太陽の大なる力を認めて、若し世に宗教なるものがあり神有りとなれば太陽即ち神である。太陽の外に我らは神と云物の存在

を認めぬと云ふてをる。彼が信仰は確である。却て有がたき感情の富でをる人たちは太陽の力をヘツケルほどに認めてをらぬ。我々も太陽の大なるエネルギーの源であることはヘツケルと同じく認めてをると共に太陽に對して宗教的の尊崇性を以て深く敬禮してをる。是また彌陀無量光の物質的顯現なることを。若し佛陀に大なる力ならんか何にして太陽の如きの大() (發現し) (太陽の大なるを認むる人はいよゝ彌陀の)

(ヘツケルは心靈の方面に於ては盲目である。靈界の太陽無量光如來の永恒に衆生の心靈を照臨し給ふことは信せぬ。自ら信せざるのみならず他人の信仰までも彼らは迷信として排斥してをる。其れは何故ぞとなれば、彼は靈界の心眼開けざるが故である。ヘツケルの如くに科學方面にのみ偏見する人は概して彼の如くである。我々は彼らが靈性の缺乏するを寧ろ憐むのである。然れども彼らが亦自己の認めてをる範圍に在つては堅き信仰を以てをる。吾人はヘツケルが太陽を信する如く、太陽の吾人の此身體を養成するに大なる恩恵のあることを深く信じてをるが故に、心靈界の太陽とも云ふべき無量光如來を深く信す。無量光如來は靈性開けて始めて信することを得。頃者の哲學者が科學と哲學との境界線を爲して、

すべて自然界の感覺に於て認め得らるゝ方を科學の範圍と爲して、人の直覺若しくは直觀すべき方面を哲學の區域とす。故に直觀界の方は人の精神が進めば進むほど廣くまた深く彌入れば彌微妙にして實に重々無盡の深現を發見することを得ん。故に心靈界の方面は平凡の人には一向に闇黒である。平凡の人は唯肉眼にて見える方面のみを實境界と認めて直觀すべき心靈界に於て至微至妙至極の心靈境界に重々無盡の妙象實在することを覺らず。さればプラトニーが凡夫の畫とするところは聖人の夜にて聖人の畫と觀てをる方面は凡夫の夜とすと。實に然り。此心靈界に於て()

甚深微妙の界あり。

例へば自然界の事物に對しても自然科學の知識なき人は自然界の事理を明らむる能はず、靈界に於ても能く心靈を研きて始めて心靈界の微妙不可思議の境界を知ること

法身報身

超自然主義の春は已に經にけるも、第三期の光明主義の夏は來にけり。本來宇宙萬有はことごとく法身如來藏の顯現にして、我等は法身の子たると共に、世界性の因果の子である。法身は絕對圓實性なれども依他起性の因縁性なる世界を發展して、其上に一切衆生界を發展し給ひし。されば我等衆生は世界因果性の子としては生死の凡夫罪惡の衆生である。然れども我々は如來法身の子としては佛性を具し佛に成り得るゝ性を具有してをる。報身としては我ら衆生が法身から稟けたる佛性を孵化し靈性を發展し完全なる人格を養成し給ふ靈格に在ませり。

若し法身をば卵子を産出した親とすれば報身は慈悲を以て衆生の靈性を孵化し給ふミオヤに在ます。若し夫れ法身のミオヤが在まして衆生佛性の本と爲り、一切萬物の設備を以て我等衆生を活して下さるとも、報身如來の光明に攝取靈化せらるゝにあらざれば、我等は唯だ動物として活くるのみ、眞の價値なきなり。人生は無量光如來の光明を被りて永遠の生命と圓滿なる人格を期する目的ありて始めて無上の價値あり。若しまた報身無量光如來いかに大威神大慈悲大智慧ありて衆生を攝取し給ふとも、衆生に法身より稟たる靈性具有するにあらざれば攝化の功また無からん。法身は我等衆生の佛性のミオヤなると共に一切萬物の設備を以て我らを動物とし人類として活かし給ふ。報身如來は我等が佛性を孵化して永恒涅槃の常樂を與へ、また我等を圓滿なる人格と靈化し給ふ。我等はミオヤを尊むと共にまた有がたき成せざるをえぬ。

光明

無邊光佛。法界無邊なり。虚空無邊なり。虚空無邊なれば國土も亦無邊なり。國土無邊なれば衆生無邊なり。衆生無邊なれば衆生の心品亦無邊なり。

法華の五百塵點の喩の如く、たとへ五百萬億那由他の國土を抹して墨としこの墨を以て五百萬億那由他の世界を過ぎ一點たらし乃至展轉して本の墨を悉く盡すに至らば東方無量無邊不可説の世界を過ぐべく、たとへ斯の如く過ぐとも虚空無邊なり。何ぞ邊際の遠近を知らんや。空間の無邊尙邊際ありとするも彌陀の光明は邊際あるべからず。この無邊の國土及び衆生をして悉く光被するが故に無邊光となづく。

無碍光。彌陀光明無邊法界遍く照して其中の衆生も無邊なり。三世間三千の事相無邊の法界にわたりにて無邊なれども、もと彌陀の自性を離れざる法界なれば尊は之を知らざるなく、見ざるなし。この無量の心品を照すこと無碍なり。

何が爲に之を照したまふや。十方衆生の是處非處を知りたまふ。三業の所作を知りたまふ。衆生根性のいかゞ解()のいかゞを一時一念に知りたまふ。無碍智は無知の知、自然の知なれば無碍に照して何の爲に照したまふや之を了了(照)

衆生の信仰もすくふべきも捨つべきも之をてらしわからたまふを無碍光と云ふ。無對光。最尊の靈光は單一絶對無限にして萬物の上に超絶し廣く十方を盡して遍からざるなく之に對()するものなし。之に對せばいかなる光も威徳も悉く隱蔽してあらゆる神佛すべてのひかりは威徳勝たるも彌陀に對せば燈火の太陽に對するが如し。

いかにとなれば至精至純の理性なる故に。至美の故に。至善の故に。萬徳の歸する所の故に。一切を統御するの故に。獨尊の故に。統攝の故に。歸趣の故に。諸佛は是分身最尊は全本の故に。諸佛は用、尊は體、統一の故。

譬へば諸佛は月の如く尊は太陽の如し。月は太陽の光によつて光明あるが如し。炎王光。普遍的に彌陀の光明、普く十方に超絶し一切を攝して洩すことなきも衆生何によつて之に接すること能はず感合し靈化すること能はずとならば、

斯の如く本然の光りと衆生との隔をなすものは何ぞや。そは衆生の無明及び罪惡の垢障あればなり。上は形而上の普遍的なり。この炎王光によりて衆生の垢障覆深を消除して上の普遍的の光明をして衆生の心理も個々に心理に蒙らしむるが爲に其衆生の

障礙物を除く此の光明の力なり。衆生に屬する處の彌陀に對する阻害物甚だ多しといへどもいま三障を以て明さん。

業障。罪障。煩惱障となり。

業障とは無始より已來身口意の三業によつて造作する處の業不善惡業甚だ多し。この業因が神識に薰習し習慣性となり異熟性となり種々の性欲不同にして或は不善を好むあり、興味なるあり、惡弊なるあり。賢明なる豪富なる善良なるあり。過去といふとも前身のみをいふに非ず。中年の者には青年の日は過去なり。然れば幼年よりの所作業因が習慣性を成して己の性格を成す時は改めがたくして不善の性格は甚だ業障となる。

生れ質としての性格あり。後天に習慣性をなしたるあり。業障。煩惱衝動より出で惡習慣性格をなすを業障と云ふ。病的の惡なり。一定の快樂は數々すれば習慣となり、習慣より必需となり受感性麻痺するが故に満足を得んが爲に刺激を増加し終には性格となり惡弊症に至る。惡弊症は身體及び精神を刺激するが故に精神に病的變質生ず。第一代には惡習性なるも二代には惡遺傳即ち業障となり來る。遺傳性となる心的變質は初めて孫に現はれ、

之は通常の自我煩惱に出でし惡衝動も病的變質となりては他の苦惱を喜び甚しく嫉妬し他の財を毀損し他の困窮を見て満足とする殘忍の淫好と惡意害意相合すれば人の性格は自己の禍福を忘れて他人の苦惱を喜び他人の喜に不快を感ずる如きは亦病的にして業障とす。

脱却すべき三障

煩惱障。世界には惡の誘惑充滿し所謂六塵の如く五欲の境界等の如くなり。然れども自己に煩惱の衝動なければ其らは動機となるに非ず。惡欲望惡衝動即ち煩惱ありて五欲の境の關係より惡をなすにいたる。煩惱とは人の天然性格に出づる衝動にして無始已來の任運に具有せる垢なり。世間に云はゞ、動物原始の祖先より出たる普遍的

幸福本能の顯現なりと。此幸福主我は一切惡衝動の根本也と。此に肉慾と我慾とあり。肉慾とは營養生殖等の慾にして身を保存するにつきての天然なり。我慾とは主我的の慾にして故に己の利を貪り他の利害を顧みざる自己主我なり。これを五鈍使の惑と云ふ。この煩惱は任運に具してこの煩惱より覆ふ所となりて靈光に適せざるものなり。業障。普通根本惡の煩惱を恣にし尙一層の惡習慣より性格を作るものなり。病的の惡弊症と名づく。煩惱が欲する一の快樂を數々すれば習慣となり、習慣より必需となり、たとへば一の快樂を屢々すれば受感性麻痺するが故に同量の渴乏を治せん爲に刺激を増して必需と非常に強き刺激と相合し意志を刺激し要求の奴隸となるにいたり終には精神病的變質となり第一代には惡習慣が二代三代には遺傳となるにいたる。遺傳若しくは自己の習慣、惡弊症みな業障に屬す。業は因にして是に對する果報即ち苦毒あり。之また準じて知るべし。

罪障。根本煩惱の衝動あり。また遺傳的習慣業障に加へて身口意の三業を以て十惡等の罪をつくり、また罪業を以て惡性格を新たに増加する如きは悉く罪障とす。

三障の惡の原因によるが故に苦毒の果報ありて次第循環して常に苦を受け此苦毒及び罪過煩惱ありて尊の靈光と適合すること能はず。これを脱除せんには自己の力の及ばざる所、炎王光によりて大火炎の萬物を燒盡す如くに三障を消滅せしむるの光用あり。

これを消滅するが故に消極的に三障消滅する故に是より下個人の心理的に尊の靈化に感合して心理に接して融合靈化の思龍を獲ることを得。

根 底

我(一)の庭にいとこまかなる葉草生へるを見て思ふに彼草は甚だ小けれども彼が根は何に木つきてかいのちを保存せるやらんとおもふにこの全世界を列ぬるところの地球に依りて生活せり。我はこの肉はこの地球と(一)氣との爲に發はるゝも、肉のみな

らず、精神を賦與せられたる生類なり。我等が精神は什麼か是根底なるは無邊の宇宙現界を容れて之が本體たる處の絶對の理性大精神、是我等が根底なり。譬へば絶對精神は大洋の如し。我等が心は浪の如し。浪は即ち大海の水を離れざる如し。本體を離れて我有ことなし。若し本體を離れて我精神あらば大地を離れたる草の如し。榮ゆべき理あらんや。我ら精神無限の本體より現はれて自らいまだ自己の根底をさること能はず。いたづらに唯主我を執して無限の本體に歸ることを知らざれば、くらきより出でくらきに入る。豈にかなしきの極にあらざらんや。いかゞせば無限の光に入らん。なによりて無極のいのちを得ん。自己が自己に對する目的、是なんこの無限にかなふべき徑路をもとめてねてもさめても求むる處是のみ。しかるに最勝最易のみちを得たり。

まごころをさぐげて

絶待なるかぎりなきひかりにて終りなきいのちに攝してすてたまはざるまことのひとりのちの聖名をあがめてすくひをいのり、かぎりなきひかりかぎりなきいのちの至尊にわれをすくひたまへとて空を仰て自らの心を彼に投じてのこりなからしめよ。まごころにすてざれ。無限の光にてらされて、無限の光といのちとはなりぬべし。

自己の根底なる無限のひかりをあふぎ専ら念じ彼みひかりに神を凝らし彼の實現をいのりまた是に感謝してやまざれ。

自己の根底とは遍空箇。根底とて膈や胸臆に之をとどむなかれ。仰いで盡十方無碍光如来を念じ奉れよ。無碍光の實現せんことをいのり奉れ。

宗教關係 啓示の要素及比例

啓示を得んと欲せば一の神尊を表明すべき要素を定め之が實在を實現せんことに意を注ぎ之を發現するに至るまで一に凝神して止む可らず。

禪門に四十八則乃至一千七百の公案あるは宗教機能を發展せんが爲の機關なるが如し。

客體を表明し且つ之が機關に用ゆべき形式の如くは若し之を美術に例せば彼は文人畫の如く兪にし且雅なり。此は丹畫の如く彩色爛々たり。彼の十牛の圖は此の觀經曼多羅と對すべく、彼の天然の山即山水即水。

或は無聲の聲を聞き、無色に色を見、何れに一千七百の公案、機に對しての、無限の機あり。法又無量ならざるべからず。

彼は其素を貴び、此は其文を尊ぶ。

在來淨土宗の客體の表明は常麻曼多羅或は慧心僧都の二十五聖曼多羅、

觀經爾陀經の説相等なり。

一向宗にては盡十方無礙光如來を以て表明せり。

慧心僧都の空中面貌のみを表し給ふも且單純にして可なり。

啓示の表明、感覺的法則

1. 日の没する時形懸鼓の如くなるを見よ。
2. 水の激清なるを見よ。
3. 水の映徹せるを。
4. 瑠璃寶地の内外映徹せるを。
5. 地光り月星の如く虚空に懸處して光明臺となり。
6. 光花の如し。

7. 七重行樹。
8. 七重寶網樹上に覆へり。
9. 寶蓋の中に一切の佛事を現す。
10. 八池水七寶所成。
11. 水如意珠玉より出つ。
12. 金剛の底沙。
13. 雜色蓮華。
14. 珠より金色光明を湧出す。
15. 光化して百寶色の鳥と爲る。
16. 寶樓閣ありて高く聳ゆ。
17. 樓閣中に諸天ありて伎樂をなす。
18. 無量壽佛空中に住立したまふ。
19. 觀音勢至左右に侍立して光明熾盛なり。
20. 寶地の上に蓮華の想を、一々の葉百寶色。
21. 寶臺は金剛赤色等の寶妙真珠の網を以て交飾せり。
22. 四柱の寶幢寶幔天宮の如し。
23. 大蓮 上佛菩薩の像みな光明を放つ。
24. 水流光明諸寶鳥皆妙法を説く。
25. 佛の身閻浮且金色の如し。
26. 眉間白毫は右旋婉轉。
27. 佛眼大海水の如し。
28. 身の毛孔より光を放つ。
29. 四光大千の如し。
30. 四光に化佛化菩薩あり。

- 31。八萬の相。
- 32。八萬の隨形好。
- 33。光明遍く十方法界を照したまふ。
- 34。十方諸佛を見上る。
- 35。眉間の白毫を觀すべし。
- 36。觀音菩薩身紫金色。
- 37。頂に肉髻あり。
- 38。圓光中に化佛。
- 39。化菩薩諸天あり。
- 40。五道衆生現す。
- 41。頂上天冠摩尼寶。
- 42。天冠に立てる化佛。
- 43。眉間毫相七寶色。
- 44。手掌に雜色の華。
- 45。勢至菩薩觀音の如し。

抽象的啓示の形式

如來は是法界身衆生思想中に入りたまふ。(是形而上義なれども觀門に用ゆるもよし。)

是の即是三十二相。

是心佛を作る。是心是佛なり。諸佛正徧知海は心想より生ず。

如來 正徧知 佛世尊を觀すべし(已上形而上論なれども觀門に用ゆるもよし)

大圓鏡智を以て十方法界を一時に照したまふ。
 平等性智を以て我等が佛性平等を
 妙觀察智を以て 我等が根機を知り三業の所作を知りたまふ。

念佛衆生 成所作智 我等が心の中に現じたまふ。
 攝取不捨 大慈悲を以て 我等をあはれみたまふ。

神聖を以て 我等に畏敬の念を發さしめたまふ。
 正義を以て 我等を正義になさしめたまふ。
 大願力を以て 我等を攝受したまふ。

佛身を觀するを以ての故に佛心を觀す。

〔大慈無限にして我等に と靈福を與玉ふ。〕

〔大悲無限にして我等のすべての憂悲苦惱を除かせたまふ。〕

古來諸師——元照師彌陀經疏に

彼佛現に道場に坐して依正莊嚴光明相好を想ふべし。

此身久しく苦海に沈み生死に漂流して孤露にして依なきこと譬ば嬰兒の坑罕に墮在して父母を叫喚すれば急に危忙を救ふ如し。志を一にして依投して懇に解脱を求め聲々相續し念々移らざれ。

法の彌陀

絶對無限の一體が三方面に開展す。

(一) 絶對本體 萬物の根底 無明の關係より差別の法界となり。	(二) 差別法界 無差別の本體より現象界となる。 攝取の光明によれば終局目的に致一す。	(三) 攝化光明 差別の法界の自性を照し末を攝して終局目的の本に歸す。 一切の萬物を開展して攝化。 同體なれども一たび覺するものは終局目的の光となりて現るゝ。
---------------------------------------	---------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------

彌陀とは絶対無限の義にして其體不可思議。學語にて真如、法性、第一義と云。宗教的に阿彌陀と號く。是法の彌陀とは萬法を攝して遺すことなき法體なり。

萬物この規によらざるもの有ことなし。華嚴に心と佛と衆生とは是三無差別と。心と佛と衆生との三方面に開展しこの軌持を説れたり。

宗教は客體を本とし客體を中心とし客體に歸着すべき宗教の通規によつて定むる時は

彌陀絶対無限を根底とし之に歸せざる可らざるなり。これを法の彌陀と名づく。心佛、衆生の三法を宗教の用語によれば、絶対の法身と、差別の法界と、攝化の光明との三方面は本一體にして開展して三方面とす。而も絶対無限の三方面なれば一なりといふべからず、異なりといふべからず。實體の法身は萬物を攝し一切を生ず。起信論に如來藏を説て能く一切の法を攝し一切の法を生ずとは是なり。

第二。

差別の法界は法身に對すれば攝せられ生ぜらるゝものにして無限の差別界なり。言を換れば被造物なり。この被造物は自己の根底何たるを識らず。終局目的も未だ覺らざる間は天然の生活自己の目的を以て足れりとするも終局目的の光明より自己を見れば自己を照さるゝ時は自己の目的を犠牲にして真理の光なる目的に任せるに至る。

第三。

絶対無限は理として被造物をして真理の光なる終局目的に之を攝取し其差別自己を解脱し高等に靈化して終局目的の統一の軌持なかるべからず。すべての萬類を攝取し真理の終局統攝の軌として無限の光壽と現はるゝなり。

第一。

本體は真理の理性を賦與せしも(一)差別の法界に無明のために理性の隠没せられ共眞(面)目を失ふに至るも終局の(三)攝化の光明は其弊垢の衣の中より真理の摩

尼珠を顯示するに至る。

絶対無限の理

彌陀を知らんと欲せば先づ絶対無限の空間と時間とに對して自己を返照す。

真如は真理は如々にして時間と空間とを超越して絶対なる理性なり。此絶対の中に此大陽系の中なる一球を視ればは大虚の一微塵を見るが如くならん。此地球の中なる自己の量幾干ぞや。此絶対なる超絶理性の中に現れたる現象界是に處せる地球の自己なり。

先自己の精神を極めて精練熟考して純粹理性を發見すべし。

此世界は絶対より見れば比較すべからざる一少分にして且つ無明態なるもの、絶対には明と無明となきも一たび迷なる無明なる世界と現じたる上には此より彼に臨めば光明態なり。此光明とは超自然の絶対理性にして是客體の本質なり。

彌陀には本體としても終局としても其體には本より異なるものにあらずれども自己の無明の爲に曾て無明態となりし、彌陀の終局目的としては無限の光となり無上の恩寵と顯はる。無上の恩寵無限の光に對しては深く憧憬の心を起し無明の爲に意識せざりし自己の天眞の父たることは攝取の恩寵によりて初めて意識するに至る。

萬物は皆絶対無限の光の中において自ら之を知らず。すべての中に彌陀を見て無限の光を見、何もかもみな神聖なる彌陀の光なるを覺れば

太陽も無限の光りは我等にこの肉のために有限の光(一)をしめしたまふ。この現象界を(一)も無限の光はわれらに有限の現界となる。無限の徳を何事も彌陀の命令と信じて日々の行を神聖にするは是無限の神を信じたるなり。

絶対の本體はもと超理性の光明精神態にして無限なりとすれば一切の處として彌陀ならざるなし。この真理を本質としながら世界の萬類は無明に覆はれて自己の本體の

理性の光明かくれて暗ふかき心にしたがひて種々の差別の性質をつくりて十界無量の差別とはなり、人の身を受け主我の妄執ふかくして自性の理かすかにして顯はれがたし。

主我執なる迷をあきらめ絶對真理の源に歸せしめんが爲に絶對無限の光りは人の神と現れちかひのかみ恩寵の光りとなり終局に真理の歸路をしめたまふ。また絶對無限の至尊は無限の光と壽とを離れたるものがあさましくも差別のまよひに主我を執し人の身を受けてまこととし自己の理性本是彌陀の聖理たることを忘れ歸趣を示すために無礙の光より法藏を顯はしてちかひて無限のひかりをしらしめて無限の光と壽とにいたらしむ。

我ら及び一切の世界のちゝ絶對無限なるみひかりといのちの至尊なり。しかれば現宇宙は絶對なるひかりのみこゝろにつゝまれたるなり。我ら自ら自己のもとをわすれてくらきにまどひで我とおもへり。われら生れながら心の目旨しいて真理を見るあたはず。

自らかきをもてへだてたり。かぎりなきひかりとかぎりなきいのちをうしなへり。我は是理性とくらきこゝろとまよひとを有せり。我らかすかにも理性の賦與せられたるは是かぎりなきひかりの子たることのしるしなり。

此絶對無限の本體と現象界とは誰か司どる。

絶對無限の本、無我の我の外に是を司るもの有るなし。是無限の光と無限の壽となり。

絶對無限自己とは是誰ぞ、名づくべからず。

強て名けば絶對無限の光と無限の壽、即梵語の阿彌陀なり。是絶對真理なり。真理の故に横に空間に偏し時間に偏す。

人あり。佛をきらふ。

汝名をきらうや、實體をきらうや。

名は是無限の光、無限のいのち即真理なり。

體は是萬物の本體、是をきらひて何ぞ死せざる。

祈 禱

聖尊に真心を捧て聖徳を讚美し頌詠し恭敬し禮拜して罪の赦しと恩寵とを乞ふ。祈るときは一心清淨にして恭敬をつくし、聖尊の前に在ることを思ひ、我祈を必ず聽しめし玉はんことをおもふべし。南無とは我一心全心全力をさゝげたることなり。

十 界

無量の事理とは其相いかなるものぞ。法界無量の法相もて如來の一法身如來性よりいへば、生滅と不生滅と二つとなり、依正二報色心二相事理法界等もとは彌陀の法身等流の法なれども、末は分れて無量となり、而して天臺は三千十界百如三千の事相を擧げて無量を顯はし、華嚴には（以下中絶）

十法を以て重々無塵無量法界を示されたり。天臺の三千の諸相は簡にして分り易し。天臺にては（衆生の一心を發足點として開きて三千となり、いまは客

體如來藏性を本として分れて三千と成る。もと一法身の中に於て之を迷悟によりて六法界と四法界と顯はれ何れも本は彌陀の法身なれども開きは六法界明るきは四界、六凡とは地獄餓鬼畜生の三惡道と修羅人間天上の三善と。光に背きて迷となりし心に善惡ありても彌陀の法身よりいで、背けるものを迷とし、向けるものを四聖とし、背けるものは本性を失ふて明き中に自らくらみて苦しみをうけ無明煩惱とによつて苦を感じ生死に流轉す。向ふものは明るきが故に萬法を了々として悟の真理にかなふ生活をなす。この十法界に各々相と性質と其體量と其力用と業作とを異にしましたそれには

種々の身を受くる原因と資縁との結果と應報とが各々殊格にて其もとは心の業作のいかじとまつて十法界にさまざまの身をうけ相も體も格別に顯れたるのである。心の本質はもと如來藏性よりいで、清なれども六法界迷の刺激に薰習せられて其本性を染汚し習慣とか性格になりて心と口と行とによりて異熟識をつくりて六道となり十法界と顯はるゝなり。この十法界は受想行識の心と形質と器世間との三種の世間が各々格別である。地獄には身も心も國土もまた性質も相貌も體量も悉く別々である。

この十法界三千の事相を以て無盡の世界をなしてあるが、もと彌陀の法身中の根底より顯はれたる現象界なり。然るに彌陀の報身は是等背きたるものをして本覺に歸せしめんが爲に、事法界を照すひかりを以て六道を事法界に無量の光明となり此ひかりにあふものは迷を轉じて聖に向ふ。

已に此ひかりにあふて自己一人のみをてらして但に三垢のみを消滅して未だ積極的に眞善界の聖徳と靈徳とを受くに至らざるものを聲聞と緣覺といふ。彼等は三垢は苦の因なるを覺り但だこれが脱却のみの利益を以て自ら足れりと爲す。故に大乘法樂と法喜甚深微妙の淨界無量の法樂と至高善の境界は未だ知らざるものなり。菩薩は背きたる法界の性質未だ全く脱却せざれど分に解脱靈化の徳を以て背きたるものをして非なることを覺らしめ本に歸らしめんが爲につとむるものを菩薩と云ふ。佛とは衆生の爲に人格を示現すといへどもすべての背きたる三垢已に解脱したるのみならず積極として至眞至善至美の徳悉く完全し圓滿し聖徳と靈福を以て精神を満しめ毫も惡素質なくして人格を以て彌陀の聖徳を顯して衆生を救靈せしむる救世主を佛と云ふ。各一佛世界を領して所化の境とす。十方微塵の世界に示現す。

佛は救世主なり。

佛救世主は釋迦牟尼なり、及十方諸佛なり。

此世界に示現したまふ救世主は釋迦牟尼の外にあることなし。

救世主は獨一の尊より見れば已に迷たる子ども救濟せんが爲に分化して遣したま

ふに外ならず。然ども初めは衆生の方よりは謂へば、救世主は長らく修行の結果として大悟して獨一の神を自ら悟りしものなり。

救世主は衆生の爲に初めは隨緣の法を示して後に眞實に獨一の尊をあらはす。救主何故に初より獨一の尊を示して恩寵を預らしめざるや。

衆生の糠糟を除きて後に殊勝の法を示さんが爲め又初めに淺劣なる法を示して比較的獨一最勝を顯さんが爲なり。

十方無量の諸佛を説こといかに。

初め衆生また人格の外に救主を認識すること能はず。故に初應化の佛の外に最尊あることを教へず。十方諸佛も悉く彌陀分化の應身なり。諸佛を以て却て彌陀應用の廣大なることを顯はす。

十方諸佛を分化することいかに。

彌陀光明體普く法界に滿れども諸佛を分化して之を顯はすに非ざれば衆生之を知ること能はず。いかに其光用を示すや。

救主釋尊身口意の三業及び一代の歴史は悉く光明の用を示したるなり。十方諸佛もまた復然らん。

三世一念同時態

神の寫象は理性、神の寫象は全く眞實直觀の同時態なるは一切知態、其内容の變轉全く理性的なるは一切慧態、觀念の内容を不斷に實現意志は即一切能態なり。力と能力と意志とは同一なればなり。

神の本體は不識的精神態なり。意識は物質的現存よりも出でず、又物質は意識よりも出でず唯物論も唯心論も誤れり。内外二者の根底として之を産出する神は物質にも意識にもあらず、意識は有せざる處にして物質的現存と現するには不識的なる物質を

現するには不識的ならざるべからず。

四〇

内外物心二者の根底たる絶待は一に偏すべからず。

絶對的不識的精神の意志と寫象即ち一切能と一切慧とを有するものが物質現存の外
界を。(斷絶)

絶對精神。神の本體は超自然なり。絶待なる不識的非人格なる精神なるを信じ。

神の機能も人の意識に現るゝまでは不識的に、神の機能も宗教關係に入つて意識に
入るなり。

不識的精神。無智智。自然智。

吾人は神の中に生き動き存在し神は吾人の中に存すべし。神が吾人と異なる()し
て存せば神の致一は望みなし。

神は其本質にては人と同じく不識的に、其の機能の或者にては意識に入るなり。然
れども神は自ら意識せず。人の意識に於て意識的となり、人の神を意識するを助く。
有限の個人的意識を離れば神は全く不識的なり。

絶對的觀念には過去未來も常に現在にしていつも現在ならざるなし、無量劫即ち當
念を離れず。

不識的一切智慧は内面的には其外面的なる世界顯現を包括すること恰も圓あれば必
ず其中心あるに似たり。

神の意慾は統一的全體として世界にて常に一定の意志を得來るも之意の満足は全く
不識的なり。

神は全體の擔保たり絶待主體なり。

四一

昭和五年五月二十五日印刷
昭和五年五月二十八日發行
編輯兼發行人 山崎
印刷所 小石川水道端二ノ四
發行所 小石川水道端二ノ四
山崎
小林
辨
光太郎
成